

祖父が作る自慢の米

広島睿智学園中学校二年 土井 愛祐美

私の家では、ほぼ毎食ご飯かぞう。最近では、パニや麺類を主食にしている家庭もある。のどほびいだろうか。しかし、私は時間をかけて炊き上かるお米が大好きだ。それは、祖父たちとが毎年手間暇かけて、想いを込めて作ったお米だからだ。

小学六年生の七月、私は祖父たちと一緒に米作りをすることにした。祖父の家では毎年

親戚を集めて米作りを行う。頑張って今年も良い米を作ろう。と言う祖父の掛け声がかかると、私は元氣よく「はっ」と言った。ほせほら、そのときまで田んぼの外からしか応援をしない。かたは、私も米作りに参加することかでき、嬉しかった。だからだ。田植が始まる時、祖父はまず私に丁寧に苗の植え方を教えてくれた。張しほがらも、祖父と並んで一緒に作業を苗を植える。初めて田植をする私にとって

は、土の中に足を入れたことも、苗を持つたことも全てが新鮮だった。そして、自分の手で植えた稲を見たときは感激したのと同時に本当にこの苗からお米が生まれるのか不思議だった。その日から、私は田んぼの様子を見に行くことがさらに楽しみになりました。あふ月、苗が時間をかけながら成長してゆく姿を見て、私はあふことに気がつきました。それは、毎日祖父が田んぼの苗を病気に病気に病みに病みに管理してくれていたことだ。今思えば、祖父は毎朝早くから田んぼの様子を見に行き、草を刈ったり肥料を与えたりしていた。十月になると、いよいよ稲刈りが始まる。長い時間をかけて成長した稲は、高く立派に育っていた。私は、「や」とニコニコと来たものだ。と達成感が胸かいてぱりだした。皆が協力して稲を刈り、ていく。私は、刈った稲をトラクターに乗せる役割を任された。稲を抱えたとときには、重さに驚いたのを覚えていす。七月の苗はあふほど軽か、たのみに、約三ヶ月

を経て育った稲はずり重かった。この
重みには祖父の苦労も感じた。また祖父は、
「米という字を分解すると、八十八になる。
米作りは、八十八回手間をかけて作られる
から美味しくできるとだよ。」
と教えてくれた。その言葉は、祖父が米作り
をすく々と重んじていると思っ
た。
最近では、お米を食べられることは当たり前
前だと思っ、何も感謝せず淡々と食べてい子
人も明日の日ははいいうか。私も実際に体
験をしてみて気づいたが、お米が作られる子背
景には努力があり、約一年間の苦労がある。
だからこそ、お米を食べられることに感謝を
しなければならぬと思う。今年で八十一歳
になった祖父は、今でも家族や周りのために
お米を作り続けています。残念ながら、今はコ
ロナ禍のおかげで、祖父の家に行き米作りを手作
うことはできません。それでも、祖父が作っ
たお米が届き、食べたときは、かりと祖父
の愛情を確かかに感じることがあります。このお

米一粒を作すのに、暑さに負けず草を刈り
たり肥料を撒いたりしているのだと思うと、本
本には有難い。高齢になつた今でも、お米を作
り続ける精神は本当に職人技であり、私たち
家族の自慢のお米だ。だから、今日も私は「
ありかとう」の気持ちを含めて「いたたま
す」